『竹取物語』〔かぐや姫の生い立ち〕の表現技法

――特に「ちご（児）」に注目して――

関　一雄

はじめに

『竹取物語』の冒頭段〔かぐや姫の生い立ち〕には、これまであまり取り上げられてこなかった疑問乃至問題にすべき表現が散見する。本稿はその中で、多くは乳児・幼児を意味する「ちご」を中心に私見を提示する。最初に、本文にいくつかの符号を付して引用する。

いまは昔、竹取の翁といふもの有けり‖。野山に**まじり**て竹を取りつゝ、よろづの事に使ひけり‖。名をば、さかきのみやつことなむいひける‖。

その竹の中に、もと光る竹なむひと筋ありける‖。**あやしがり**て、寄りて見るに、筒の中光りたりφ。それを見れば、三寸ばかりなる人、いとうつくしうてゐたりφ。翁言ふやう、「我が、朝ごと夕ごとに見る竹の中に**おはする**にて知りぬ。子になり**給**べき人なめり」とて、手に**うち入れ**て家へ持ちて来ぬφ。めの女にあづけてやしなはすφ。うつくしき事かぎりなしφ。いとおさなければ、こに入れてやしなふφ。

竹取の翁、竹を取るに、この子を見つけて後に竹取るに、節をへだててよごとに、黄金ある竹を見つくる事かさなりぬφ。かくて翁、やう〳〵ゆたかになり行φ。

この*1**ちご**、やしなふ程に、**すく〳〵**と大きになりまさるφ。三月ばかりになるほどに、よき程なる人に成ぬれば、髪上げなど左右して、髪上げさせ、裳着すφ。帳のうちよりもいださず、いつきやしなふφ。この*2**ちご**のかたち、けうらなる事、世になく、屋のうちは、くらき所なく、光みちたりφ。翁、心地あしく苦しき時も、この子を見れば、苦しき事もやみぬφ。腹立たしきこともなぐさみ**けり**‖。

翁、竹を取る事久しくなりぬφ。いきおひ猛の者に成に**けり**‖。この子、いと大きに成ぬれば、名を、みむろといんべの秋田をよびて、つけさすφ。秋田、なよ竹のかぐや姫とつけつφ。この程三日、**うちあげ遊ぶ**φ。よろづの遊びをぞしける‖。おとこはうけきらはず呼びつどへて、いとかしこく遊ぶφ

世界のおのこ、貴なるもいやしきも、いかでこのかぐや姫を、得てしかな、見てしかなと、をとに聞きめでて**まとふ**φ。そのあたりの垣にも、家の門にも、をる人だにたはやすくは見るまじき物を、夜るはやすきいも寝ず、闇の夜に出て、穴をくじり、かひ間見、**まとひあへり**φ。さる時よりなむ、「よばひ」とは言ひける。

（堀内秀晃「新日本古典文学大系」によるが、一部テキストの漢字を底本の仮名表記に直す）

一　「けり」の用法と登場人物の動作の表現

a．二重傍線部の「けり」は、語り手（作者）が見聞した過去の事実を語るマーカー。語り始めと終わりと、その途中の段落に用いられる。

助動詞「けり」の表す過去は、単なる過去ではなく、右に述べたように、物語の語り手が実際に見聞した過去の事実であり、この話は実話であるというメッセージが込められている。冒頭の「いま」は、この物語の中での「今」であり、語り手が聴き手に語っている時の「今」ではない。従って現代語訳すれば、〈コノ物語ノ時ハ昔（ノコト）〉となる。この「昔」は、現代語で年配者などがつぶやく〈昔ハヨカッタ〉と言う時の実感の籠もった昔である。

b．φは、聴き手が過去の事をあたかも現在のこととして感情移入した段階で表れる。

『竹取物語』の「けり」の用法の特徴は、語りの始めに繰り返し用いられるが、その後は用いられなくなる。本文の4行目「もと光る竹なむひと筋ありける。」まで用いられるが、5行目「筒の中光りたり。」では、「けり」が用いられない。本文ではφの符号を添えた。右に述べたように聴き手は語り手の語りに引き入れられ「昔」と思っていたことが、正に今起こっていることのように受け取るのである。現代で言えば、映画館などでスクリーンに映し出される世界が最初は別の世界であると思って見ていたのが、次第に今現在のように感じ取れるようになっていくのと同じような語りの展開がφでなされている。そして映画が終わった時、現実の世界に視聴者は引き戻される。引用文最終行「「よばひ」とは言ひける。」で物語の聴き手は語りの世界から現実に戻る。ただしその途中、20行目「なぐさみけり」、21行目「いきおひ猛の者に成にけり。」と「けり」が用いられるのはなぜか。この行間に小段落とも言うべき時の流れがある、と見たい。これは、本稿の主題である「ちご（児）」の用法と関わるので、後述するところとする。

c．太字の動詞及び擬態語は、登場人物の動作（演技）を描写する語（動画的表現）。

「けり」によって、物語世界の時とその流れが示されるが、その世界（舞台）に登場してくる人物（役者）の動き（演技）は、動詞によって表される。この段落では、竹取の翁が主役であるが、その動作のうち太字で示した1行目「**まじり**（まじる）」、4行目「**あやしがり**（あやしがる）」、8行目「**うち入れ**（うち入る）」、24行目「**うちあげ遊ぶ**」に注目したい。**まじる**＝入ッテ動キ回る・**あやしがる**＝ハテナト首ヲ傾ゲル・**うち入る**＝サット入レル・**うちあげ遊ぶ**＝オオッピラニ宴ヲ催ス　のように、現代語訳してみると、**目に映じ、耳に聴こえる動作**であることが確かめられる。さきに物語を映画になぞらえて述べたが、俳優（役者）はその演技（動き・表情）で観客を魅了するのである。段落の末尾に近く登場する「世界のおのこ」の動作27行目「**まとふ**」、最終行「**まとひあへ**（まとひあふ）」も、**まとふ**＝ウロウロト動キ回ル・**まとひあふ**＝皆デウロウロト動キ回ルで、同じことが言える。現代語訳でサット・ウロウロトなどの擬態語を用いたが、本文の14行目「**すく〳〵と**」も同じである。

二　翁の会話に用いられた敬語

d．翁は「三寸ばかりなる人」に対し「おはする・なり給」の尊敬語を用いているが、地の文は無敬語である。

地の文が語り手による登場人物（役者）の演技の描写とその情景（背景）であるのに対し、会話文は登場人物のセリフである。

翁のセリフで、かぐや姫に対し尊敬語を用いたのは「（竹の中からの）異常出生の子は神の子だとする信仰があった」と説明する注釈書もある。しかしながら地の文では無敬語である。これをどう説明するのか。作者は地の文ではそれを明かさず、翁を通してそのことを示唆したと考えられなくもないが、私見では翁は「三寸ばかりなる人」の色白で立派な衣装を着けた姿を見て、このお方は高貴な身分の人であるととっさに察して、敬語を使ってかぐや姫に呼びかけたものと解する。これに関しては曾根誠一説が関わるが、後述することとする。ここでは、地の文と会話文は、『竹取物語』では表現技法が異なるとする考えを提示する。

三　〔かぐや姫の生い立ち〕過程での「ちご（児）」の用法

e．＊ちごは、チゴ（乳児）で、乳児・幼児を表すのが、一般。14行目＊1ちごは幼児の意で分かるが、「髪上げなど左右して、髪上げさせ、裳着す」の後の17行目＊2ちごは、不審。

「髪上げ」は、ほとんどの注釈書が「女子の成人式で、裳着の儀と同時に行われる」と説明するが、それであれば＊2ちごを、「乳児・幼児」と見るのは疑問である。ではそこをどう解しているか、以下、管見に入った六つの注釈書を見ていく。

1坂倉篤義『日本古典文学大系　竹取物語』〔一九五七年〕

○＊1「ちご」の頭注に「もと乳児を指すが、四、五歳の幼児をもいう。」とあるが、○＊2「ちご」には、注は無く、現代語訳も無い。

2上坂信男『竹取物語　全訳注』（講談社学術文庫）〔一九七八年〕

○＊1「ちご」・＊2「ちご」とも「子」と訳す。〈語釈〉に「ちご　稚児。乳児。生後、それほど年月経ていない子ども」とあるが、＊2「ちご」を「子」と現代語訳するのにはその差が分からず疑義が残る。

3片桐洋一『新編日本古典文学全集　竹取物語』〔一九九四年〕

○＊1「ちご」は「幼児」、○＊2「ちご」は「女の子」と訳す。＊1「ちご」＊2「ちご」とも注が無く、現代語訳の違いに疑義が残る。

4上坂信男『竹取物語全評釈　本文評釈篇』〔一九九九年〕

○＊1「ちご」・＊2「ちご」とも「稚児」と訳す。〈釈〉で、「（ちご）は幼児のこと。「乳子」の意であろうと言われる。（中略）本来は乳呑み子だが、少し大きくなったものもいい、やがて、寺院で働く少年や法会に奉仕する子供も稚児というようになる」とある。現代語の「稚児」は、「①社寺の行列に美装して加わる男女の児童。②男色の相手役としての少年。」（『新明解国語辞典　第六版』）とあるので、本文のままの語（稚児）で現代語訳するのには疑義が残る。

5上原作和・安藤徹・外山敦子『かぐや姫と絵巻の世界』〔二〇一二年〕

他の注釈書と違い古本系統本文によるが、「ちご」の二カ所

は同じ。

○*1「ちご」・*2「ちご」とも「幼児」と訳す。*1「ちご」・*2「ちご」ともに注が無く、特に*2「ちご」の「幼児」とする現代語訳には疑義が残る。

6大井田晴彦『竹取物語　現代語訳対照・索引付』〔二〇一二年〕

○*1「ちご」は「幼児」、*2「ちご」は「子」と訳す。*1「ちご」・*2「ちご」ともに注が無く*2「ちご」の「子」の現代語訳に疑義が残る。

このように1のような訳語のないものを除くと、2～6では、「髪上げ」には前述のような注があるが、「ちご」には自明のこととするのか、注のないものもあり、*1「ちご」*2「ちご」の相違に配慮した訳がなされていない。*2「ちご」について、3では「女の子」とするが、その説明がなく、5の「幼児」という訳は、「髪上げ」の注と齟齬している。また、同じ注釈者の2と4では前者が「子」、後者が「稚児」とある。本格的な注釈書である4の「稚児」は、当該箇所で指摘した通り、現代語訳としては不適切であるが、敢えて本文のままの訳語を当てたのかも知れない。

四　曽根誠一論文の謎解き

諸注釈書が見過ごしてきたと思われるこの疑問を解く鍵となるのが、次の論文である。

曽根誠一『竹取物語』「子になり給ふべき人」の一読解（『研究講座　竹取物語の視界』〈一九九八年〉、論文初出「文学・語学一〇九号」〈一九八六年〉

曾根論文では、翁がかぐや姫に敬語を用いたのは、翁と姫の「力関係を根本的に規定していたと理解され、ここに〈禁止〉―〈違反〉という話型の〈禁止〉が内包されていると読み取れるのではあるまいか。」とする本稿とは異なる視点からの問題提起がなされている。

しかし曾根論文と本稿での接点は、次の箇所である。

曾根論文は、前掲の本文の14行目「この*1児（ちご）やしなふ程に、すく〳〵と大きになりまさるゆ。」から、21～23行目「この子、いと大きに成ぬれば、名を、みむろといんべの秋田をよびて、つけさすゆ。」を引用し、その間の、18行目から21行目までの「翁、心地あしく苦しき時も、この子を見れば、苦しき事もやみぬゆ。腹立たしきこともなぐさみ**けり**。翁、竹を取る事久しくなりぬゆ。いきおひ猛の者に成に**けり**。」の「翁」が竹取という賤民から長者になるまでの過程の語りがなされていることを指摘し、次のように述べる。

ここで疑問に思うのは、髪上げ・裳着と命名とは時をおかずに行われた儀式であるはずなのに、かぐや姫の身体に関する叙述が「すくすくと大きになりまさる」結果としての「よき程なる人」と「いと大きになりぬれば」とで少しニュアンスが相違することである。これは、**成人と認めるに充分な背丈の成長と女性としての充分な成熟**との差異であると理解できよう。

曾根論文では、この引用に続き、話型に関わる論述が続くが、私見では表現技法の観点からすれば、翁に関する語りの中で、時の流れが明確に示されているとする。すなわち前述したことであるが、翁に関する語りの途中に「翁、（中略）腹立たしきこともなぐさみ**けり**。翁、竹を取る事久しくなりぬ。いきおひ猛の者に成にけり。」

と「けり」が2回用いられている。この語りの中の「竹を取る事久しくなりぬφ。」という表現と相俟って二つの「けり」の間に時が経過し、曾根論文が指摘するように「女性としての充分な成熟」がなされ、「秋田、なよたけのかぐや姫とつけつφ。」という命名の語りの後に「**うちあげ遊ぶ**（オオッピラニ宴ヲ催ス）」という動画的表現が続くという技法である。従って、髪上げ・裳着は時を置かずなされても、命名は女性としての充分な成熟を待ってなされ、「**うち上げ遊ぶ**」へと物語は展開していく。この流れのなかで、成熟前の姫は「ちご（児）」という語を用いてなされたのである。

おわりに

『竹取物語』の本文には証本とすべき写本はなく、問題の二つの「ちご」（特に*2「ちご」）の表記が「こ（子）」の誤りではないか、との疑義も当然のこととして残る。従って本稿の論述は、現在に伝わる転写本・版本の本文が正しいものとの前提でなされている。また、二つの「ちご」を現代語訳で区別するのはむずかしい。前掲の2・4の注釈書は同じ著者であるが、2では二つとも「子」、4では二つとも「稚児」と訳す。後者で本文のままの語（古語）を用いたのは前述した通り、敢えてなされたものか、と疑ったのはこのためである。

本稿の記述は、旧著『平安物語の動画的表現と役柄語』〔二〇〇九年〕と重なるところが多いが、二つの「ちご」の説明のために重複したことをお許し願いたい。

（せき・かずお）